



MINATO-TOKYO

# みなとユネスコ 会報

# Bulletin

MINATO UNESCO ASSOCIATION NEWS & CALENDAR

ISSUED BY/MINATO UNESCO ASSN. 16-3,SHIMBASHI 3-CHOME MINATO-KU TOKYO 105-0004/HIROSHI NAGANO PRES.  
発行所/港ユネスコ協会 〒105-0004 東京都港区新橋3-16-3 Tel: 03-3434-2300 Fax: 03-3434-2233 発行人/永野博  
Mail: info@minatounesco.jp http://minato-unesco.jp

2018年3月1日発行 第151号

目次	
P1 巻頭言：日本のテロリズム、アメリカのテロリズム	P11 書道体験教室
P2-4 「文化プログラムと地域おこし」シンポジウム	P12 イタリア大使館訪問
P5 坐禅体験講座	P13 茶の湯体験教室
P6-8 MUA 日本語スピーチコンテスト	P14-15 新年会員懇親会
P8-10 巻頭言つづき	P16 事務局便り/編集後記

## 日本のテロリズム、アメリカのテロリズム そしてテロリズムの戦争と世界平和

港ユネスコ協会 名誉会長 三輪 公 忠



地下鉄サリン事件があった時、「テロ」という言葉は聞かれなかったと思う。しかしアメリカではすぐそれを「テロ」と呼んだ。アメリカで日常語である「テロ」は日本ではふつう使われていない言葉だったのである。

アメリカでは早くからオウム真理教のことを政権奪取を狙うテロリスト教団とみていた。彼らの手段がロシアから手に入れたサリンだということも把握していた。日本の治安当局だってそれくらいは承知していてもおかしくない。だが巷の常識との隔たりは大きかった。テロリスト集団が身近にいることも知らずに、平穏に暮らしていた。そこに地下鉄サリン事件が突発した。「テロ」が起こったのである。

試みに手元にある古い『広辞苑』を覗いてみる。昭和30年版である。見出し語として「テロ、テロリスト、テロリズム、テロル」があることを知る。「テロル」とは「あらゆる暴力手段に訴えて敵方を威嚇すること。テロ」とある。

ちょうど長い年月をかけたオウム裁判が結審したばかりで、新聞で整理された情報を読むことが出来る。例えば『日本経済新聞』の1月30日、31日、そして2月1日の上、中、下の連続記事を見ると、先ず1989年11月に坂本弁護士一家殺害事件があった。その5年後の94年6月の長野県松本市でサリン事件が、そして翌95年3月には東京の地下鉄日比谷線客車内でのサリン事件が起こった。地下鉄事件では13名が死亡し、6000人以上が負傷した。

この時アメリカではすでにオウム真理教をテロ集団としてフォローしてきており、当然サリンの散布をテロ行為と的確に捉えた。それに対し当時の日本の報道ではテロリズムという概念での捉え方が欠落していたように記憶する。

テロリズムは単なる暴力行為とは異なる。権力の掌握という目的意識が無ければならない。教祖グル(師)松本智津夫にはその意志があったことが一番の判決で次のように示された。「救済の名の下に日本を支配

(P.8へつづく)

## 2017年度 港ユネスコ協会 シンポジウム 『文化プログラムと地域おこし』

日時：2017年11月28日（火） 18:30～20:30  
会場：国際文化会館 西館4階 会議室 （港区六本木5-11-6）

東京オリンピック・パラリンピックの一翼を担うのが文化プログラム。全国3千を超える市町村の人々に自信と誇りを残す画期的な活動が進行しています。2020年に向かって何が起きているのか？今回のシンポジウムでは「文化プログラムと地域おこし」をテーマとし、お招きしたイタリア考古学者でプロジェクト推進者の青柳前文化庁長官およびこの分野に詳しい2名のパネリストから下記の基調講演、プレゼンテーションを頂き、参加者との活発な討論がなされました。ゲストの紹介、全体の進行には永野 MUA 会長が当たりました。



### 基調講演：『2020年を契機に、文化の棚卸しをしよう』

青柳正規氏（前文化庁長官、40年にわたってイタリアの古代ローマの遺跡を発掘調査。著書に『ローマ帝国』、『文化立国論』などがある）

地方を歩くと、2020年東京オリンピック・パラリンピックに絡んだ文化プログラムへの関心は高いと感じる。しかし東京だけは関心が低いように思える。さまざまな地方に足を運んでみると、日本は手足が凍傷状態になっているのではと思えるほど活力がなくなっている。東京に住んでいると実感がないが、地方の衰退がじわじわと全体に影響を及ぼしつつある。



第二次世界大戦が終わった1945年、日本の人口は7,100万人。1980年には1億1,700万人。つまり35年で5,600万人ほど増えた。この人口増加が経済力アップの一番の理由だった。今、人口は減りつつあるのだから、経済が縮小するのは当然の結果。2010年と2015年の国勢調査を比較すると、約95万人減っている。これは和歌山県一つが消失したのと同じ。2020年には少なくとも200万人以上減るだろうと言われる。一人当たりGDPを400万円とすると、400万円×200万人、これだけのGDPが減る。政府は一人当たりのGDPをイノベーションで増やせば大丈夫と言うが、ここ20年間、日本の一人当たりのGDPはずっと横ばい。香港、シンガポールにも抜かれて、現在世界22位くらい。政府は昨年、GDPを500兆から600兆に増やすと発表した。経済同友会のトップが即日、「それはあり得ない」と反論。政府は今年初め、GDPの根拠を組み替えて530兆円に変更したが、統計の根拠を変更するのは趨勢を掴むという目的が果たせず、まずいやり方だ。

私は1944年生まれ。団塊の世代と言われる人々も含め、おそらくわが国の歴史上最も恵まれた世代として育ってきた。しかし現在、日本の累積赤字は約1,080兆円、一人当たり850万円に上る。安倍政権のように強力な政府でも、果敢な政策展開が出来ない。日本全体が糖尿病にかかって、穏やかに蝕まれてつつある。同様に人口減を危機として捉えたスウェーデンでは、婚外子にも嫡出子と完ぺきに同じ権利を与えることにした結果、5年前には婚外子の若年労働者数が嫡出子よりも多くなった。フランスも同じ制度を採用し、20歳から35歳の労働者のうち40%が婚外子である。ところが日本では夫婦別姓でさえも認めていない。周回遅れの少子化対策しかやっていない。

包括的な国の豊かさの指数（IWW）は、人的資本・生産資本・自然資本を評価する。これを人口当たりで割ると、2008年の段階で世界のトップは日本になった。その富の源泉は、圧倒的に人的資本、つまり人間の教育度、職業のスキルである。日本は明治政府以降、教育重視の国家政策をずっと続けてきた。

ところが OECD の GDP に対する公財政教育支出の平均的な比率は 5% を上回っているにも関わらず、わが国は 4% にも届いていない。つまり国として「貧しくなりましょう」と皆に押し付けているのが現状である。

2020 年のオリンピック・パラリンピックが迫り、東京の我々は経済がうまく行っているかのような錯覚を持っている。しかし足元まで厳しい現実が迫りつつある。2020 年以降、食うに困る程ではないにしても、公共交通機関の本数が減るなど便利さがなくなっていくだろう。その中でもなお精神的豊かさを保つには、いろんな地域にある文化を掘り起こすことが必要で、そうすることによって日本全体が縮小しても質的なレベルを保つことができる。例えば村の鎮守様の秋祭り、夏の収穫祭、お神楽など、これらは世界的に見ても価値ある文化行為だということを見直してみよう。

クーベルタンは、「オリンピックはスポーツと文化の両輪で進めるものだ」と言った。戦前までは例えば絵画部門、彫刻部門に金、銀、銅のメダルを授与していたときもある。戦後はそういう物が一切なくなったが、ロンドンオリンピックの頃から、近代オリンピックの原点に戻ろう、スポーツだけでなく文化もやろうと、文化プログラムを非常に一生けん命やった。例えばシェイクスピア劇を 30 何か国の人がある国の言葉で、イギリスで演じた。ロンドンオリンピックは文化の祭典としても大成功した。東京オリンピック・パラリンピックによって日本もこれにあやかり、文化的見直しの契機になるのではないかと、私を私はいろんなところに出向いてお願いしている。文化プログラムとは、文化の祭典としてあらゆる人々が参加出来るプログラムを全都道府県において実施し、地域を活性化することが目標。

昨年テレビで見たヘアスタイリストの野沢さん。南相馬へ毎週出掛けてご婦人たちのヘアを綺麗にし、たまにはファッションショーをする。町中に笑いがあふれる。これも文化である。能の梅若玄祥さんはギリシャの昔話をお能にしてギリシャの古代劇場で演じた。経済危機真っ只中にもかかわらず、アテネから 1 万人近くの人がこのお能を見に訪れてくれた。ストーリーはギリシャの人なら誰でも知っているので、お能の演劇としての崇高性が理解され、大成功だった。「おわら風の盆」は、高橋治が小説に書いたので急に有名になり、石川さゆりの演歌で火が付き、多くの人が訪れ、町の景観も変わった。

能登半島の珠洲市では 5 月から 10 月まで 51 の祭があり、キリコという大きな山車を引き、練り歩く。観光客はいつ訪れても祭が見られるので流動人口が増えた。また能登半島の先端に位置するために交通量が少ない。自動運転車の実験場にしたらという提案があり、実現した結果、自動運転車の確保により足の悪いご老人が病院通い出来るようになり、限界集落から町へ移住する必要がなくなった。

鹿児島の喜界島はサンゴの北限に近いので、これを地域おこしの軸にしようとしている。隠岐の島では、高校を地域おこしのコアにしようと、町立の「隠岐の国学習センター」という予備校を作った。地元の高校の進学率が上がり、県外から生徒が留学してくるようになった。町全体が活気を取り戻し、他の産業も活性化し、うまく回っている。地域おこしのモデルとして視察団があちこちからやって来る。

それぞれの土地には多様性があるので、この多様性を見極め、楽しむことがこれからの日本には必要だ。そうすれば、少くも厳しくなってもどうにか耐えられるのではないか。重厚長大が駄目になって文化による地域おこしをやろうというキッカケを作ったのが、フランスのナント市だった。共通した課題が世界中に生まれており、文化が一つの強力な手段になり得ることが証明されつつある。都市だけでなく、小さな集落でも文化プログラムによってそれぞれの文化を見直してほしい。それによって、2020 年以降の進む方向が見えてくるのではないか。

## **パネリスト・プレゼン：『2020 年に向けた文化プログラムの枠組』**

**堀口昭仁氏**（文化庁長官官房政策課専門職、文化庁で 2020 年に向けた文化プログラムの企画立案や総合調整を担当。政策研究大学院大学文化政策プログラム修了）

オリンピック憲章には、「複数の文化イベントのプログラムを計画しなければならない」とある。しかし「文化プログラム」の定義はなく、開催国にとっては自由に、何をやっても良いと取れる。これまでの

流れを見ると、文化プログラムは2012年ロンドン大会で新時代に突入した。ロンドン大会は、2008年北京大会終了後の4年間で、イギリス全土の1,000か所以上において文化プログラムを開催した。例えばシェイクスピアをイギリス各地で上演する演劇祭、ピカデリーサーカスの広場でサーカスを行うイベント、身体障害のあるアーティストの作品を公開したUNLIMITEDなど。観光客が増加、ロンドンの土地ブランドの上昇などの具体的成果を上げた。

日本も大きな影響を受け、現在、国だけでなく地方も障害者芸術を含む多くのイベントを計画している。2020年東京大会はロンドンを超える文化プログラムを日本全国各地で実施することを目標にしている。メインプログラムである東京2020Nippon フェスティバルでは、青柳先生が総合プロデューサーを務める。いくつかのプログラムは既に昨年からスタートしており、認証件数も増えつつある。組織委員会や国、東京都、地方自治体等多様な主体が文化プログラムに取り組んでいるが、多様な日本文化を海外に発信すると同時に、これを地域創生、活性化、共生社会の実現に繋げていくことが共通のコンセプトと言えるのではないかと。今日のために私が勝手に作ったキャッチコピーは：

Culture for All  
Treasure for You



文化庁が取り組んでいる事例をいくつか紹介する：

事例 ①ニッポンたからものプロジェクト。「日本遺産」に認定された伝統芸能公演を実施するもの。今年の11月には津和野公演を実施し、永明寺で日本遺産のストーリーを背景に若手による伝統芸能公演や津和野踊りを披露した。

事例 ②国際北陸工芸サミットにおいて、工芸ハッカソン（ハッキングとマラソンを合わせた造語）を開催し、高岡の伝統工芸とテクノロジーやファッション等のコラボレーションを促進した。

事例 ③文化プログラムポータルサイト「Culture NIPPON」を構築・運営し、全国各地の文化資源の発掘・発信に取り組んでいる。

青柳正規著 「文化立国論—日本のソフトパワーの底力」 ちくま新書 2015年 を是非ご一読下さい。

### パネリスト・プレゼン：『ひとりひとりの“MY文化プログラム”』

小池真一氏（47 文化プログラム・プロジェクトマネジャー、共同通信社文化部で自治体や企業との文化プログラムの企画等を担当。著書に「小澤征爾 音楽ひとりひとりの夕陽」など）

文化プログラムとは何か？自分なりに調べた結論は、「社会的課題を発見して解決し、社会をより良くする表現・文化の取り組み。」文化プログラムの5W1Hを考えると、(いつ) 2020年東京オリンピック・パラリンピックに向け(どこで) 東京だけでなく日本全国で(何を) 文化の企画・イベントを(何故) 2020年東京大会を盛り上げるため(どのように) 文化力を使い、育て、生み出しながら、であるが、(誰が) が曖昧である。さっきのfor Youはとても良いと思う。「私が」やるのだと思って貰いたい。そういう流れに結び付けたいと願って、中高生に地元の文化イベントを取材させる取り組みを行っている。



「参加することに意義がある」というが、参加には2種類ある：①色々なプログラムを楽しむ ②MY文化プログラムをつくる。後者の一例として、正岡子規の故郷である愛媛の野球文化イベントや、eスポーツがある。

東北大震災の一週間後、気仙沼の避難所で小学生が「ファイト新聞」を創刊した。暗いことは書かない方針で、日刊として50号まで続いた。子供たちはパリのユネスコ本部に招かれ、「ジュニアジャーナリスト」として表彰された。これがきっかけになって中高生によるジャーナリスト活動、文化プログラムプレイヤー(P.15へ続く)



## 第 2 回坐禅体験講座

日時 2017年12月15日(金)  
場所 港区内愛宕萬年山 青松寺

会員開発委員会の事業として、2回目の坐禅体験講座を開催しました。当初の申込み状況から、募集人員に到達するの心配がありましたが、最終的には募集人員を大幅に上回る52人の申込みがありました。このうち最終的に46人（うち外国人2名）が参加しました。

体験当日、参加者は15時半に青松寺に集合し、事務局からの説明の後、釜田無閑師と副住職の案内により山門や納経堂の拝観を行いました。愛宕下通りに面した山門には1階に四天王像、2階に釈迦の弟子十六羅漢の像があり、本堂裏手には泳ぐ龍を配したステンドグラスを嵌め込んだ絢爛な造りの納経堂がありました。これらに加え、紅葉が映える池なども見て回りました。

続いて本堂内に入り、ご住職から青松寺の由来、歴史、坐禅の心得などのお話をお聞きした後、僧堂（坐禅堂）に移動し、坐禅の体験となりました。坐禅堂ではコート、靴下、時計は着用不可とのご指示により、参加者はそれらを脱いで坐禅堂内に入りました。坐禅は、修行僧が寝起きする場所である畳の上で実施しますが、今回は参加者が多かったため、坐禅場所は全て埋まりました。

最初に、副住職から坐禅堂の造り、堂内の生活や坐禅時の足や手の組み方、体の姿勢、坐禅に入る際の作法(左右揺振)、座蒲(ざぶ)の使用方法などについて教えがあり、この後に、放禅鐘による合図で坐禅を開始しました。開始間もなくは人の動く気配や咳払いが聞こえましたが、時間が経つとともに、都会のど真ん中にいることを感じさせる車のエンジン音などの喧騒が耳に届いてくる以外、坐禅堂の中の音は無くなり、ピーンと張りつめた静寂が訪れました。そして、頭の中が無の境地に至った坐禅の初体験でした。

今回は約20分弱という少し短めの坐禅時間でしたが、参加者は、冬の坐禅という寒さ厳しい中での体験に、修行僧の厳しい修行を少し味わったと思います。坐禅終了後は、坐禅堂の2階にある講話室において、ドラ焼きやみかんなどを食べながらの茶話会となりました。ここでは参加者から、坐禅では僧侶が警策（さく）で坐禅者の肩を叩くシーンを見るが今回無かった理由や坐禅の際の瞑想中の思考などに関し次々に質問があり、釜田師からの確で分かり易い説明がなされました。

こうして2時間の予定は、あっという間に過ぎ、すっかり夜の帳が下りた中で坐禅体験講座は終了しました。参加者の皆様、ご参加有難うございました。



(会員 石井義明)

# 第一回 港ユネスコ協会(MUA)日本語スピーチ・コンテスト

日時:2018年1月20日(土)13:30~16:00

会場:港区立生涯学習センター101号室

日本社会の動向を考えると、外国人の定住傾向は今後ますます強まることが予想されます。特に、港区は人口の8%が外国人です。日本の社会や文化に日頃から深く接している世界各国の人々が日本語でスピーチすることは、それを聞く人々に対して、そして発表する本人にとっても、「新しい視点を与えてくれる好機」です。港ユネスコ協会では、在日外国人の皆様の日頃の日本語学習の成果を発表する機会を提供するとともに、日本社会や文化の特色をとらえた面白い話が聞ける場、国際理解を深める場となることを希望して、新たにこの企画を実施することになりました。当日は、スピーカー、審査員、玉川大学ユネスコクラブ生徒、三田高校ユネスコ委員会生徒、六本木高校生徒をはじめ、一般、MUA会員などを含め合計65名の皆さんが参加しました。

全体の進行は下記の式次第にそって執り行われました：

1. 開会宣言
2. MUA 永野会長挨拶（右写真）
3. スピーカー紹介
4. スピーチ開始
5. 休憩
6. 審査/会場見学者とスピーカーの交流会
7. 審査結果報告
8. 表彰式
9. 参加者の感想
10. 交流会総括
11. 閉会の辞
12. スピーカーの記念撮影



## 第1部 スピーチ

下記7名のスピーカーが順番に自己紹介を行った後、それぞれのテーマについてスピーチを行いました：

- 1番 Ms. バトスヘ・ウヌビレグ（モンゴル） 宇都宮大学大学院生  
「モンゴル孫世代のチャレンジ」
- 2番 Ms. シュ・ネイ（中国） MNK 日本語クラス  
「おもてなしの心」
- 3番 Ms. ウィニー・リー・シュウチ（マレーシア） 国際日本語学院生  
「日本の良いところ、不思議なところ」
- 4番 Mr. アショー・アハメド・エー（サウジアラビア） 東海大学修士課程  
「今まで日本で学んだこと・経験したこと=日常の五心=」
- 5番 Ms. マヌエラ・ハートヴィッヒ（ドイツ） 筑波大学大学院生  
「ポテンシャルをフルに引っ張り出せば・気候変動問題から見る感じたもの」
- 6番 Ms. ゴ・イケン（台湾） 田町日本語クラブ  
「日本の育児」
- 7番 Mr. シディキ・タンヴィル・バルニー（パキスタン） 通訳・翻訳業  
「おもてなしの国ニッポン」

## 第2部（会場参加者とスピーカーとの交流会 / 審査および審査結果の発表）

### 会場参加者とスピーカーの交流会：

玉川大学 小林 亮教授のご指導の下、参加者が3つのグループに分かれて、それぞれスピーカーを囲みながら、「留学生の苦労話、日本や日本語への思い、日本観や今後の展開など」について自由な質疑応答を行いました。（この間、審査委員は別室にて審査を行いました）



### 審査結果の発表

審査委員長明治学院大学渋谷恵教授より、以下の通り受賞者の発表が行われました：



- |              |                             |
|--------------|-----------------------------|
| 「最優秀賞」       | アショー・アハメド・モハメド・エー (サウジアラビア) |
| 「港ユネスコ協会会長賞」 | ウィニー・リー・シュウチ (マレーシア)        |
| 「審査員特別賞」     | シディキ・タンヴィル・バルニー (パキスタン)     |

### 表彰式

永野 博 MUA 会長から上記3賞の受賞者に対して、それぞれ賞状、カツプ、記念品（輪島塗の夫婦箸）が、また優秀賞の方々に対しては賞状、盾、記念品（輪島塗の夫婦箸）が授与されました。



### 交流会総括

上記第2部の「スピーカーと会場参加者との交流会」に関して、玉川大学小林教授に以下のように総括して頂きました：



「スピーカーの方々と参加者の方々との交流と対話も盛大に行われて良かった。参加者全員にとって非常に満足度の高い充実したイベントだったと思う」

## 閉会の辞

菊地 MUA 副会長

### 主催者側からのひとこと:

今回の MUA 新企画の実施にあたりまして、玉川大学ユネスコクラブ、三田高校ユネスコ委員会、六本木高校の皆様から頂戴したご協力に対し、心よりお礼申し上げます。

どのスピーチも素晴らしい内容で、記念すべき第一回スピーチ・コンテストにふさわしいものでした。第 2 部の「スピーカーと会場参加者との交流会」はスピーカーの方々を囲んで大いに交流が盛り上がり、相互理解が深まる楽しい時間となりました。「違いを知り、違いを楽しむこと」こそ、人類の平和・共存・発展へ繋がるという想いを新たにしました。

(副会長 平方一代)

---

## (P.1 より続く) 日本のテロリズム、アメリカのテロリズム

し、その王になろうと各犯行を敢行した首謀者」と位置づけたのである。

裁判の結果がオウム真理教事件は紛れも無いテロリズムであることを明らかにしたわけだが、事件勃発当時の報道でテロという用語が聞かれなかったわけは何だったのだろうか。アメリカでは始めからテロとされていたものが。これは日本の「平和ボケ」と一括していいのだろう。戦前には、「暗殺」とか「クーデター」が「テロ」の同義語としてもっばらこれらの用語に特化していたわけだったが。

さて先にも指摘したように、アメリカでは早速日本の首都東京のど真ん中で起こったテロリスト集団による殺傷事件として報道された。しかし日本では「テロ」という言葉は聞かれなかった。ではいったい日本では「テロ」行為をどんな言葉で表現していたのだろうか。昭和 37 年 (1962) に出版された室伏哲郎著『日本のテロリスト』という一書がある。日本語のタイトルはダストカバーだけで、それを剥すとハードカバーの表紙に刻印された書名に日本語は無く、英文のみで **The Modern History of Assassination and Coup D'Etat in Japan** とある。本書の題名『日本のテロリスト』は英語の題名から忠実に邦訳すれば「日本における暗殺とクーデターの近現代史」となるのである。

これは面白い符合である。戦前の 1930 年代だったか、アメリカでは **Government by Assassination** (『暗殺政治』) と題する書籍が出版されていた。テロリズムが左右する日本政治を批判的に描いているのであった。室伏哲郎も「テロ」に当る言葉に「アサンネーション」を充てていたのである。

戦前の日本で、軍閥の国政壟断が猖獗しつつあった時、それを受けたアメリカの出版界では、**Government by Assassination** のようなタイトルの書物が出始めていたのである。アメリカ人なら『テロが壟断する政治』といった訳をつけたかもしれない。

さて室伏哲郎の『日本のテロリズム』の内容に触れておこう。巻末に収録されている加害者と被害者を時系列に整理掲載している「近代現代日本暗殺事件年表」がその一端をコンパクトに示しているといえる。被害者のトップに置かれているのは万延元年 (1860) 「斬刺殺」された「大老井伊直弼」であり、手段は「短銃、日本刀」とある。「暗殺者」は水戸浪士と薩摩浪士、そして場所は「日比谷桜田門外」と読める。この年表の最後は昭和 36 年 (1961) 12 月 12 日の「暗殺クーデター計画」とされるもので、被害者は「政府要人」とのみあり、手段は「ライフル銃、ピストル」と明記されている。その間およそ 100 年の間に 114 件の類似事件 (計画を含む) が列記されている。平均すると毎年一件強の「テロ」事件 (計画を含む) があったことになる。



この年表から分る事は「暗殺」と呼ばれていた日本のテロリズムの手段＝兇器は先ず日本刀である。やがて飛び道具の爆弾とかピストルになっていく。そしてテロを決行した者、つまり暗殺者は武士であった。明治維新後から先の戦争つまり中国に始まり対米英蘭の全面的戦争としての「大東亜戦争」に負けた後の変革期までは、日本国は華族、士族、平民という階級社会であった。そのもとでは、凶行に及ぶ者は士族階級から輩出しており、はじめのうちは平民出身者は皆無であった。平民が暗殺者になるという一大転機が起こるのは、1925年の男子普通選挙法の成立と共に、制度的に民主主義が導入されてからであった。昭和5年(1930)11月14日、東京駅のプラットホームで、総理大臣浜口雄幸が平民佐郷屋留雄のモーゼル・オートマチック8連発ピストルで襲撃されたのがその嚆矢であった。

平民化は、茨城県の漁民、農民の青年をまとめた元日蓮宗僧侶の井上日召をイデオログとし、「一人一殺、一殺多生」を使命とする血盟団の登場で一時代を画することになる。その特徴を一言にまとめれば、何処までも天皇制への忠誠を建前として、貧富の差が耐え難いほどになっていた自由主義、資本主義の近代国家日本に天皇の赤子として「一君万民」の平等思想の具体化を目指すものであった。

昭和7年(1932)2月9日に血盟団員小沼昭(23)が元大蔵大臣で日本銀行総裁井上準之助を射殺、続いて同年3月5日には、同じく血盟団の菱沼五郎(21)が三井合名会社理事長の団琢磨を射殺した。彼らが実行したのは典型的な「一人一殺、一殺多生」の暗殺＝テロリズムであったが、正規軍によるクーデター＝テロリズムとしては、海軍軍人が総理大臣犬養毅を射殺した5・15事件(昭和7年5月15日)、と陸軍の近衛連隊のエリート青年将校指揮のもと、徴兵検査で甲種合格した平民兵士が帝都東京の中心部を占拠した2・26事件(昭和11年2月26日)を挙げることが出来る。

そして田舎青年による「一人一殺」のテロも、東京帝国大学教授平泉澄の私塾で、正規の東大生を対象に行われた特別講義(皇国史観の日本歴史)を許可を得て襖越しに聴講したエリート海軍青年将校等による犬養毅総理大臣射殺事件も、国民の同情を集めていた。刑罰の減刑を求める投書が新聞紙上に紹介されたりしていた。非合法暴力行為として非難されるよりも、社会の諸悪をただそうとする義挙であると捉えられ、義賊と賛美されさえしていたのである。当時の日本社会ではこれら度重なるテロ事件を弾劾する気運よりも、当の平泉教授がいみじくも述懐したように、閉塞感に満ちた社会に時ならず、さっと吹いた爽やかな風のように感じる民心もあったのである。

昭和6年のいわゆる満州事変、そして同11年の盧溝橋事件に端を発する中国本土における日中戦争は、この世相の延長線上にあった。そして戦火は米英をはじめ、いわゆる列強の権益が集中する揚子江流域に拡大していくのであった。

要約すれば、戦前の天皇制国家日本においては、対外戦争＝侵略戦争に先立ってテロ行為があった。それは武士、士族をテロリストとした時代から平民の時代へと、つまり民主主義の変則的進展と共に頻発していった。

当時のアメリカは東アジアの平和を揺るがす元凶は日本の軍閥であり、その軍閥を動かしているのはテロであると認識していた。日本による真珠湾奇襲攻撃で始まった米英蘭を相手にした太平洋戦争は、結局、日本のテロリズム体質を抜本的に変革できない限り避けられないものであった。米国はそう認識していた。それゆえこの日本を抜本的に変革するためには、日本の軍閥体質を徹底的にぶちのめし解体しなければならないのであった。無条件降伏をその目的達成のための絶対的条件とした。それを確保するために戦い続け、ついに原爆投下にまで至ったのである。

原爆投下は、単に日本の侵略戦争に対する報復行為であっただけではないだろう。世界全般に向けて、アメリカの平和維持者としての覚悟を明示したものである。人類がはじめて手にした絶対的テロリズムの手段であった。原子爆弾による広島、長崎の壊滅と共にアメリカはまさに唯一絶対のテロリスト国家となったのである。それに対抗するためソヴィエト連邦が核武装に成功した結果、勢力均衡の原理に従った米ソをリーダーとする冷戦という平和維持体制が生み出されたのである。

この間アメリカ国民は自国がテロリスト国家であるなどと考える事はなかったろう。核兵器の登場からおおよそ半世紀目の2001年の9月11日、ニューヨークの世界貿易センタービルはテロリスト集団アルカイダの標的となり、前代未聞の航空機の激突を手段とするテロによって爆破倒壊されたのである。同時に首都ワシントンの国防総省も同様な航空機によるテロ攻撃の標的にされた。この異様な攻撃はどう捉えていいのかアメリカ人を戸惑わせた。唯一思いつく、半世紀も前の国難、真珠湾の奇襲攻撃であった。国家では無くテロ集団アルカイダの非合法破壊行為と日本帝国の主権行為としての国際戦争の開始とを同列に置いたのである。テロ行為がイスラム教徒によるものとの認識から、ブッシュ大統領は中世の十字軍を想起し、“crusade”の戦争に突入する断固たる覚悟を披瀝したのである。

日本人だったら、自国の近現代史における「テロ」の形態を思い起こし、アルカイダに一抹の同情を覚えたかも知れない。国際社会における正義の確立、つまりグローバリズムの名の下に、金融資本主義がもたらしている不平等世界の現実に立ち向かう、いうならば「世直し一揆」の暴力行為であった。然しそのように考えるアメリカ市民は皆無に等しかったろう。真珠湾の騙し討ちと同一視した大衆にとっては、ブッシュのスタンスは判りやすかっただろう。サダム・フセインのイラクを倒せば対米テロを根絶できると算段したようだ。

それというのも対米戦争に敗北した日本がアメリカの占領支配の下で民主主義政治と自由主義経済体制の確立に舵を切り、瞬く間に変革を達成したからである。イラクに同じことが起こらないはずはないと楽観していた。しかし期待通りにはならなかった。それどころか、テロへの報復行為に堕した占領支配はイラク人捕虜への処遇が文明国アメリカ合衆国国民にとって正視できない猟奇の様相まで呈した。それがテロとの対決が文明の相克として避けがたく生み出した抗争の姿であったのだろう。

さて、アメリカのジャーナリズムは戦前の日本の政治を「暗殺による統治」と嘲笑ったようであったが、アメリカにも類似の事例を探し出すことはできる。アフリカ系市民に対する数限りない超法規的リンチがそのひとつである。それによって、白人市民の利害が超法規的に守られたのである。暗殺された大統領も J.F.ケネディーのみではない。そして何よりも際立っているのは国際政治におけるアメリカのテロリスト的体質であり、それは核兵器を手段とする恐怖政治である。それは第二次大戦の終末期、広島長崎へ投下された原爆が物語っている。

「原爆統治」あるいは「核兵器テロ支配」といってもよさそうな恐怖政治である。それは第二次世界大戦後のアメリカのスーパーパワーぶりに如実に示されている。それと太刀打ちするために核兵器を自前で開発し、冷戦時代をもたらしたソ連。そしてついには昨今、国際社会を騒がせている北朝鮮の核武装と大陸間弾道弾の実用化の進行がある。それらは総て始めに広島長崎があつてのことである。果たしてアメリカにテロ大国としての自覚はあるのか。

マサチューセッツ工科大学 (MIT) のチョムスキー教授 (Avram Noam Chomsky, 1928・12・7～) はアメリカをテロリスト国家と呼ぶのにためらいがない。チョムスキーの言語学者としての業績は多岐にわたり、人文社会科学分野における「世界最高の論客」に選出されている。1960年代にはアメリカのヴェトナム戦争に反対する運動に積極的に関わったが、それも彼の長年にわたるアメリカの対外政策批判の一環にほかならなかった。

共同通信社の渡辺陽介氏にはアメリカ在勤中にチョムスキーにインタビューを試みた記録がある。2002年1月18日のことで、前年9月11日のアルカイダによるニューヨークの世界貿易センタービルと首都ワシントンの国防総省への攻撃を突端に置きテロリズムに深く切り込んでゆく。最終的に英文でまとめられた記事は同年5月21日に「チョムスキー博士によれば、わが国アメリカこそは世界一のテロリスト国家である」との表題のもとに公表されていたのである。

日米同盟のもと、アメリカの巨大な核戦力によって少なからず維持されている日本の平和に想いを致すとき、我々は世界の他地域でそんな罪深い平和さえ享受できずにいる人々の苦難にどう応えたらよいのか真剣に考えねばならない。そして導き出された解答に注意深く本気で対応していかなければならない。  
(2018・2・24)

## 書道体験教室

日時:2017年12月2日(土) 13:30~16:00

会場:港区立生涯学習センター304号室

今回の書道体験教室には合計31名のかたが参加されました。内訳はチェコ、アゼルバイジャン、ドイツ、東ティモールおよびポルトガルの大使館関係者に留学生を加えた外国のかたが15名、港区の在住者、通学者、通勤者11名、それに講師1人とMUAのスタッフ4名でした。今回も講師は金田 萃夢(かなだ すいむ)先生(毎日書道展会員)にお願いしました。

### 内容:

1. 書道の歴史や墨、硯、筆、紙などの説明。
2. 手本を見ながらの練習。
3. 色紙に好きな字を清書する。

### ご参加下さった皆様からのアンケート回答:

- ☆充実していました。
- ☆道具も全て揃っていて手ぶらで来られて楽でした。
- ☆外国の方も多く参加されていて良かったです。
- ☆たくさん書けて良かったです。
- ☆とても良い雰囲気の中で過ごせました。
- ☆説明もとても良かったです。
- ☆心が落ち着きました。
- ☆とても良い書道入門教室でした。

### ひとこと:

日本の書道は、年々外国の方々に興味を持って頂いております。最初はペンと筆の持ち方の違いに戸惑いながらの練習も、色紙に清書をする頃には基本に個性を重ねての線の芸術が完成していました。書道を通して精神統一の時間が、外国人と日本人の交流の場になっていました事を嬉しく思います。



(副会長 平方一代)



## イタリア大使館訪問

日時：2017年12月20日（水）午後  
場所：港区三田

港ユネスコ協会会員とその家族の計20名が港区三田にあるイタリア大使館を訪問しました。大名屋敷の風情を残す三田界限。三井倶楽部、慶應義塾大学に近接した地区にあり、普段はなかなか伺うことのできない大使館です。当日の案内役は、文化・広報部のペシ・ロベルトさん（下の写真）。銀杏落葉を踏みしめながら敷地内のお池を一巡しながら、お庭、公邸の建築、石碑などについてご説明いただきました。



都会の真ん中に今なお江戸時代からの樹々が息づいている松平隠岐守の中屋敷跡。澤庵和尚の設計によるといわれ、典型的な日本庭園の様式をとどめています。特に興味あるお話は、1703年（元禄16年）2月4日、赤穂義士47名のうち、10名がこの庭の地で切腹したこと。この事件について1939年（昭和14年）に時の大使が関心を持たれ、記念碑を建立。以来、毎年大使による供養が営まれているとのことです。港区の名所でもあります。最後にイタリア関連で年間様々なイベントを開催している「イタリア文化会館（九段）」のご紹介も頂きました。

（同会館のサイト→<http://www.iictokyo.com/eventi/index.html>）



赤穂浪士の記念碑



（会員開発委員会担当 常任理事 小林敬幸）

## 茶の湯体験教室

日時:2018年1月27日(土) 13:30~16:00  
会場:港区立生涯学習センター203号室

今回は合計32名が参加して、講師の松村 宗幸先生(裏千家)から茶の湯の基本を学びました。

### 内容:

1. 茶の湯の歴史を説明
2. お辞儀の仕方、お菓子のとり方、薄茶の飲み方の説明と練習
3. 先生のお点前を拝見
4. 季節限定のお菓子「花びら餅」を食べて薄茶を頂く
5. 各自、お点前の一部を体験する

### 参加者の感想:

- ☆茶の湯の歴史や歩き方なども教わる事が出来て良かったです。
- ☆このような場がないので、興味はあるのですがなかなか実際に触れることが出来ませんでしたので貴重な体験でした。
- ☆とても良い体験でした。伝統文化に触れることは心が豊かになった気持ちで良かったです。
- ☆国際色豊かで良かったです。
- ☆自分で実際に体験できたことがとても嬉しかった。
- ☆通訳してくれるひとがいて、とても良かった。

### ひとこと:

体験教室の間、参加された皆さんは神妙に、また嬉しそうにお点前をされました。その姿が初々しくて楽しく拝見致しました。体験を2回トライされた方もいらっしゃいました。



文化体験教室委員担当 常任理事 笠原正子



## 2018年 新年会員懇親会

日時：2018年1月16日（火）正午から

会場：NEC 三田ハウス 芝倶楽部

会員・家族合わせて22名の参加で和気あいあいの雰囲気の中で開会。ゲストは“英語落語”で「日本のお笑い」を世界に広めながら「平和」を発信している鹿鳴家英楽（かなりやえいらく）師匠こと須藤達也さん。イベントの最後には清水軍治さんのアコーディオン伴奏で、全員、童謡、唱歌を熱唱しました。海外に発信するにふさわしい日本の良きお正月文化に浸りながらの楽しい会になりました。

★須藤達也さんプロフィール：神田外語大学、駒澤大学講師。落語は、立川談志の立川流に参加。同じ頃、英語落語を始めた上方の桂枝雀の活動に触発された。現在「キャナリー英語落語教室」を主宰。落語の他ウクレレを弾き、端唄、俗曲、都々逸、Jポップスなどを日英両語で歌う活動もされています。

★清水軍治さんプロフィール：“歌は世界共通の言葉、さあ歌いましょう！”と高齢者施設への慰問や、依頼を受けての歌声喫茶でのアコーディオン伴奏と司会。大きな声で歌う喜びを広くみなさんへ提供されています。港ユネスコ協会理事・港区音楽連盟会長。

会の初めには永野会長から「この一年の新規活動として“坐禅体験会”“日本語スピーチコンテスト（1/20）”の2つを開催。そして英語教室の新クラスの増設もかないました。三輪公忠名誉会長、高井光子前会長の路線を引き継ぎ、この世界情勢の中での『ユネスコ精神』の発揮を港ユのメンバー皆さまと共に進めて参ります。」の挨拶。松本副会長からは「いつまでも会の隆盛を！」の乾杯。菊地副会長からは「これからも多くの新しい方のご参加をお待ちしています。」と締めめの言葉。民間ユネスコ運動71年目に入る節目の新年会となりました。



英楽師匠の「時蕎麦」



ウクレレ漫談





清水軍治さんのアコーディオン



全員で童謡・唱歌を歌って新年をキックオフ！



(常任理事・会員開発委員会担当 小林敬幸)

---

#### (P.4 よりつづく) : 「文化プログラムと地域おこし」

センターが発足し、ユネスコには感謝している。2017年10月に文化庁主催事業になり、ご当地プレスセンターは全国に広がりつつある。これは子供たちの文化プログラムである。では大人はどうすればいいのか？

実例として、おむすびで人と人をつなぐ企画、各地のみそ文化を発掘する旅行、広辞苑を使って日本語の文化を再発見する取り組みなど、面白い遊び、試みはいろいろありうる。庶民にとって「MY文化プログラム」であるために笑いが欲しい。馬鹿だなあと思われながら、地域を元気にし、日本を元気にし、世界を元気にするものであって欲しい。

最後に30分にわたり、活発な質疑応答が交わされました。「フランスの文化予算は日本の10倍もある」、「街なかのアートはむずかしい。規制緩和が必要か?」「都会でもやれることはある」「式年遷宮の写真を渋谷で吊るして掲示したい」「長野県で若手によるアートプロジェクトを実施し、アートには越境の力があると確信した」等、興味深い発言が続きました。

(副会長 宮下ゆかり)

## 事務局便り

**【ようこそ 新入会員】** 個人会員：篠田美玲さん、目黒重子さん  
協力団体会員：国際日本語学院様

**【今後の事業予定】**（詳細は別途、チラシやホームページでご案内します）

☆4月11日(水)～初級英会話講座、毎水曜日、18:30～20:30、コース全12回（予定）  
講師：マーク・マードック先生 会場：港区立麻布区民センター

☆4月11日(水)～初中級英語講座、毎水曜日、18:30～20:30、コース全10回（予定）  
講師：笠原三郎先生 会場：港区立生涯学習センター

☆4月26日(水) 18:30～20:30 港ユネスコ協会 2018年度総会  
会場：港区立生涯学習センター305号室

**【ご寄付、ご寄贈品など。ご協力ありがとうございました。】**

- |                              |           |
|------------------------------|-----------|
| (A) 日本ユネスコ協会連盟の東日本大震災子ども支援募金 | 合計20,754円 |
| ★10月8日～9日 みなと区民まつり（バザー売上収益分） | 18,632円   |
| ★10月16日 第一回国際理解講演会           | 2,122円    |
| (B) 日本ユネスコ協会連盟 書き損じはがきのご寄付   | 80枚       |

**【ご協力のお願い】** 常時受け付け中です。事務局までお願いいたします。

\*日ユ協連・東日本大震災子ども支援募金

### 【編集後記】

- ・早いものでこの151号が今年度最終号となる。実施した事業の数は下期偏重が甚だしい年であったが、各委員会のご努力で何とか乗り切った。あとは年度末に向かって決算をまとめなければ。（須田康司）
- ・主権国家の協調体制には、外交や防衛といった政府レベルの交流に加え、民間企業等のビジネスや市民レベルの交流、さらにシンクタンクやユネスコなど国際機関の知的交流や対話の重要性も、忘れてはならないと思う。（前田幹博）
- ・平昌オリンピックが閉幕しました。日本人の活躍もさることながら、お互いを認め合う、選手間の熱い友情が垣間見えたオリンピックに胸が熱くなりました。私たちも、そうありがたいものです。（小林真弓）
- ・今年、明治維新から150周年目。先日読んだ新書では、日本が近代化に成功した原動力として、幕末期に七度に亘って米欧へ派遣された幕臣達が持ち帰った体験・知識を挙げており、興味深い視点だと感じた。（棚橋征一）

---

港ユネスコ協会事務局（火～金 10:30～17:00）

〒105-0004 東京都港区新橋 3-16-3 TEL 03(3434)2300 TEL・FAX 03(3434)2233

Eメール：[info@minatounesco.jp](mailto:info@minatounesco.jp)

ウェブサイト：<http://minato-unesco.jp>

---